

子どもからのメッセージ・ 子どもからのメッセージ

高橋 陽子

今、年中組の担任をしている。一学期が終わり、保育を離れたところでのやらねばならないことに追われる毎日である。

終業式の数日前に、私用で休むことがあった。翌日「これ、預かっていますよ」と一通の手紙を渡された。クラスの男児Aからで、その母親の字で「ようこそんせい、きょういっしょにあそんでね」と書かれて

いた。もちろん休んでいたので実現しない手紙であったが、Aのことは三歳の時から持ち上がりで担任している、私の中でどちらかというマイナ斯的に気になる存在だったので、嬉しい気持ちはもちろんあった。Aに対してだけではなく、保育中の子どもとの関わりについて考えさせられる内容に思えた。

一学期後半に、保護者との個人面談をした。その中

で、四歳から担任した女児Bの母親が「ようこそんせいは、ママよりずっと忙しいの。声なんかかけられないわ」とBが言っていたことを話した。Bは、他園から転園してきた。入園当初は、三歳児クラスに知っている女児がいたので、そちらにいつも行っている子どもだった。クラス内にいる子どもに手をとられ、なかなか三歳のクラスに出向いて行くことができないでいた。それでも、少しの機会をみては足を運び声をかけたり、そこで一緒にやりとりしたり、クラスの子どもを連れて行って顔を合わせるなどしてきた。

しばらくすると、クラスの子どもとお店を出したり、ブランコをする姿もみられるようになってきた。知っている子どもと同じ場所で同じことをする毎日から、同じクラスの子どもとおもしろそうだな、と思うことをするようになったな、という捉えをしていたところだった。

私としては、「あなたがいたい場所で一緒にいたい

人と好きなことをしているのよ。でももし、何か困ったことやわからないことがあったら、何でも担任に言ってみてね」というメッセージを送ってきたつもりだった。私を担任と認めながらも、「忙しくて、声をかけられない」でいたBは、担任が出向いていくことができるほんの一時では、満たされないものが多々あったのではないかと思う。

持ち上がりが十人、三歳の時は隣のクラスだった子どもが八人、新入園児が十六人というクラス構成で年中組をスタートさせた。三十四人の子どもと生活していく時に、ゆとりはないだろうが、ゆったり構えていたいな、と思っていた。色々な人が大勢いるからこそ、なるべくメッセージが伝わるようにと思っていた



のである。

もう一つ、「大勢と暮らしていること」も伝えてきた。この幼稚園という場所はやってみたいなあと思ったことはやっていたいのよ、でも、周りには他の子どもたち、大人、幼稚園という場所・ものがあるから、それはわかっていって欲しいということに気づいていってもらえるように声をかけてもきた。

Aの手紙やBのことばは、後者はかりが伝わってしまったのかな、と考えさせられた、ということだった。

気になる存在のAというのは、三歳で入園した当初から、母からは離れられたものの、その後は担任にくっついていて、担任がさっと他の子どものところなどに行かねばならず移動すると、泣きながら追いかけてきた。話すことははっきりしていたし、自分で身の回りのこともできていた。

担任と一緒にいることは、却って色々な人と触れた

り色々な場所に行くことができることでもある。例えば砂場に行くと、たいてい数人の子どもがそれぞれに遊んでいる。担任が砂場で遊び始めると、Aもせせせと担任にごちそうを食べさせてくれたり、担任が他の子どものごちそうを食べていると「ぼくにもちょうだい」と関わっていったり、「どうぞ」と言って自分のをさしだしていた。また園庭に出る機会が増え、砂場やお山に行く時のメンバーが決まってきた。担任がいなくても、男児Cが一緒だと庭に出られるようになっていった。

入園当初から母と別れられずに毎朝泣いていた男児Dも、担任と出かけて行く中でAやCと一緒にいることが心地よくなっていった。三人組がいつも一緒に行動するようになっていった。

Aは、三人で一緒にいたい気持ちをも、「これは三人しか使つてはいけない」と言つて物を占有することで表したり、「三人しかこの中に入つてはいけない」と

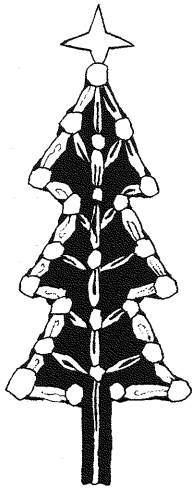
実力行使で対応したり、三人でいてうまくいかないときには二人以外を通りすがりにたたいたり蹴ったりして自分の力をアピールしていた。

力が強いので、周りの子どもたちは避けたり、反対に「Aくん、〇くんは悪いからやつつけて」と頼ってきたりだった。Aの強さに憧れる気持ちや、大好きな友だちと一緒にいたい気持ちからけんかごしになってしまうことは、入園当初不安で仕方なかったAのことを思うと、だめ、だめとはかりは言えなかった。またたとえば「そんなことしたら、悲しいわよ」的なことを言えば、言葉だけ入っっていき、そんな場面をAが見ると同じように言いに行く。しかも、つかみかからんばかりに言うのでますます怖がられてしまっていた。

年少の二学期に柔らかい素材でできている積み木で（フレールという小型積み木くらいの大きさ）船を造っていたことがあった。囲いを作りその中に入れて「海賊だ」と言っているので海賊の帽子と剣を作るこ

とを提案した。とても喜んで担任が作るのをそばで見ている。「ここ、切ってみようね」と言うと「できない」と言って船に戻ってしまふ。他の子どもの分を作っていると、戻ってきて切りだした。はさみの使い方の上手なこと！ 曲線に沿って切っていく。本当はできるけれども担任にやってもらいたいという気持ちがあったのかと気づき、剣は担任が作り渡した。船にはたたくさんの絵本やブロックが積み込まれ、他の使いたい子どもたちには不自由な思いをさせてしまったが、Aがやりたいと思ったことを一緒に作り合っただけで遊べた心地よさをAも担任も感じていた。

年中組になって、Dとは同じクラスになったが、C



は隣の組に行くことになった。入園・進級式の翌日、帰りの時間になってもAとDが部屋に戻ってこない。隣のクラスを覗くとA・C・Dが寄り添って座っていた。三人とも私のクラスに座っているのなら、昨年度の流れて、と思えるがCのクラスということ、AもDもCを頼っていたことがわかる。但し、Cはするべきことに忠実なので、帰りは自分のクラスにいるべき、と思っていたことも大きく影響している。その日は、担任が迎えに行き戻った。次の日も迎えに行つたが、その次の日からは自分たちで戻ってくるようになった。四月、五月、六月ほとんど遊んでいるときは三人だった。

三人でブランコをしているが多かった。「かわって」と言われても、自分たちが満足いくまで乗り続けていた。乗りながら、次に何をしようかを決めているようで、たいていは「○○作って」ということだった。担任が「少し待っていてね」と言えば、Cの

担任に頼みにいく。Cの担任は、気持ちにきちんと対応してくれるが多かったのだろう。まず、Cの担任に頼むようになった。そのあとで、担任に違う物を頼みに来るようになった。三人でいること、そして何かを作ってもらうことで、年中組になつて担任が替わつたことや人数が増えて思うようにいかない不安を一生懸命乗り越えようとしていることはよくわかる。しかし、一つ何か作ってもらつたことを大事に捉えていつて欲しいことは伝えたかった。

「さつき、えりせんせい（Cの担任）に○○を作つて頂いていただけけど、どうしたの？」と聞く。「引き出しにしまったよ。ようこせんせいには、まだ何も作ってもらっていないよ」と言う。確かに、「大事な物は引き出しに入れましょうね」や、「一つ作つた人にはちよつと、待つてもらわないとね」と言つて作らずじまいということが多い。ようするに「一つね」と言っているのではあるが。「一つよ」と言うことで、発想

を豊かに持つて欲しいということや、一つの物を大事に使つて欲しいということ伝えてあるつもりだった。

六月、やっと晴れて外に行くことができた日のこと、園庭に飛び出していった二人。しばらくして三人で戻ってきた。「お山をすべりたいから、段ボールちようだい」と戻ってきた。やっと外に出られて体を使つて遊びなくなつた気持ちがよくわかつたが、雨上がりに溶けてしまうことを伝える。「どこか、他のところですね」と投げてみる。「どくんもやりたいの、いつ順番がくるのかな」と言つてみる。Cはすぐに理解して段ボールをDに渡す。Dもすぐに受け取つて滑つてみる。一度滑ると、もうCに返してすべり台を下から上つたりその辺にいる、という感じである。

三人ともそれぞれにもらえると思つたようだったが、「みんなで順番に使つてね」と声をかけて一個を解体して渡した。さつと手に持つたのはC。Cを先頭

に園庭に出て行く。少しして様子を見に行くとCだけが何度も段ボールで滑っている。Aはすべり台の上のところまで上がつてくるCやDをなんとなくじましながらそこにいる。Aのそういう態度には慣れていながら上手にすりぬけては繰り返し滑るC。Dは段ボールなしで何度もCを追いかけるようにすべる。Dだつて段ボールを使つて滑りたい気持ちがあるのに、何も言おうとしない。「Dくん、ほくもやりたいって言ったの？」の担任のことばに、ことばでなく体を硬くすることばで（言いたいけど言えない自分を表現する）Dだつた。今度はCにも聞こえるように「Dくんもやりたいの、いつ順番がくるのかな」と言つてみる。Cはすぐに理解して段ボールをDに渡す。Dもすぐに受け取つて滑つてみる。一度滑ると、もうCに返してすべり台を下から上つたりその辺にいる、という感じである。

Aは「自分はやらないよ」と言う。怖がりなところ

があり（木登りはできず、C・Dが登るのを見ているだけ、というように）、自分の段ボールをもらっていたら挑戦していたかもしれないと思うと、段ボールの渡し方をもう少し慎重にするべきだったか、とも思っただ。

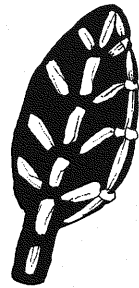
ただ、これから成長していく過程で、三人で一緒にいることは気持ちよくとも、何をするかはそれぞれ違ってくるだろう。○くんは楽しそうだけれどほくはやりたくない、と思ったときに、ではどうするかを自分で考えなければいけなくなることは必ず体験して欲しいことである。その一つとして、担任は前向きにAの気持ちを受けとめた。この日は保育時間もそれほど残されていなかったもので、そのまま降園するようになってしまった。

七月のある日、クラスの男児Eが年長組のようにお化け屋敷をしたいと言ってきた。まだ朝のうちで、一人でいた女兒Fを誘い、とても簡単なお化けを作っ

いると、Aが寄ってきた。「何やっていの？」と聞いてきた。お化け屋敷をす

ることを伝えるとAは自分もやりたい、お化けの顔を描いてお面にする、と言う。E・Fは出来上がって早くお化け屋敷をしたい。場所はもちろん、年長組がしていた四保育室分離れた小さな部屋である。「Aも完成して、みんなで行こうね」と言って待ってもらう。

お面ができ、三人のお化け役が廊下を通過してその部屋に行く。出かけるところを見ていたクラスの子どもがついてきたり、三歳児の部屋の前なので「何か始まる」ことに敏感な三歳児たちが見に来てくれる。Aは、懸命にお化け役に徹している。どんな感じか確かめたかったのか担任にお面を渡し、お化けをしてくれと言ってくる。効果音を用意していなかったたので、声



色を変えてお化け役をしてみる。教師がおばけになると、やつつけにくる子もいる中、Aは「追いかけてね」というかのように近づいてはきやーと逃げていく。この日Aは自分でやろうと決めて、自分でものを作って、自分で体を使って遊んでいた。この体験は心地よくAの中に残ったのだろう。最初に書いたAからの手紙は、もう一度あんな時間を過ごしたいというメッセージだったと思っている。

Aなどのように直接的に頼ってきてくれる子どもや、新入園児の中でもかなり気になる子どもたちとは毎日向き合う時間があるように思う。たとえ「〇〇作って」の関係や「それはしないでね」と言っただけの関わりでも、そこで一緒に過ごしたり担任のメッセージを伝えたりできるのである。が、そういうやりとりを見て「忙しそうだから」と近づけなかったり、まだ緊張感があつて様子をうかがっているだけだったりの子どもには何を伝えることができたのだろうか。

そして、メッセージを伝えるだけの関わりは子どもたちは求めていない。やはり、一緒に遊ぶこと。始まりから、満足して終わりにできるまで一緒に関わりをとんだと、この年中組の一学期はずつしりと心にとまった。

AやBは、親に自分の気持ちを伝えて、親がきちんと受けとめて担任に伝えてくれた。親に自分の気持ちを伝えられない子もいるだろうし、親によって伝えられても受け止め方はまちまちである。三十四人の子どもたちと全く同じように関わることは難しい。がこちらからメッセージを送るだけではなく、子どもから返せられるメッセージを強い弱いに関係なく受けとめ返信できる心持ちでいたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)